第八号に寄せて

吉見　孝夫

第八号をお届けします。前号で、次号は九月に出すと大見得を切りましたが、ひと月遅れとなりました。

今号は、主に古活字版『伊曽保物語』無刊記第四種本を対象としております。無刊記第四種本は天理図書館蔵の一本しか存在が知られていません。毎年夏には天理に通うのがここ何年かの恒例になりました。たいてい貴重書の閲覧室にいるのは私一人です。天下の秘庫を独占したような気分になります。館の前には、芸亭（「ゲイテイ」と読む学生がいても、あまり責められません）に因んで、高さ三メートルはあろうかという「石上宅嗣顕彰碑」。その碑文を撰したのが新村出です。イソップを追い求めると、この先学の名がどこでも付いてまわります。

前号もまた、いくつか誤りや不適切な点があると指摘を受けました。そのうちの二つをここに示し訂正いたします。

三四ページに「第二種本は下巻第二八話『蠅と蟻の事』に大きな脱落があるという特徴を持つ。」と記しました。しかし「蠅と蟻の事」は誤りで、「鳩と狐の事」とすべきところです。中巻第二八話と混同してしまいました。指摘してくださったのは遠藤潤一氏です。また遠藤氏によって、この欠落が不注意によるものではなく、意図的な改変であることが解明されています。「脱落」というと、ケアレスミスのニュアンスを持ちますので、「省略」とすべきでした。遠藤氏には、感謝とともにお詫びを申しあげなければなりません。

一九、二三ページで下巻第一九話を「かざみの事」と記しました。中務哲郎氏は「かざみ」の語形に疑問を呈されました。大系本をはじめとして通常は「がざみの事」とされます。古い文献に「かざみ」とあるのに飛びついてこうしたのですが、どうやら伊勢などの地域に限定される語形のようです。「がざみ」を排除して「かざみ」を立てる根拠にはなりません。こんな細かな箇所にまで注意を払ってくださることに感謝します。しかも、ご連絡をいただいたのが、お手元に小誌が届いたであろう日の一両日後です。こういう読者がいらっしゃることに、発行者としての幸福を感じております。

山西正子氏から興味深い話をうかがいました。山西氏の講義で、十数名の受講者は一人を除き、「きこりと斧」（もとは「きこりとヘルメス」）に登場する神を女神だと思っているというのです。男神としたのは、七〇歳を

過ぎた科目等履修生ただ一人とのことです。これには驚きました。女神などという答えは予想もしていなかったからです。そこで気になり、少し調べてみた結果を拙文にまとめ、今号に載せました。学生の演習発表に毛の生えた程度のものです。課題を提起していただいた山西氏には感謝申しあげます。

アカデミズムを離れた雑談を一つ。LIXIL という会社のＣＭで「アリとキリギリス」のパロディーが盛んに流れています。キリギリス役を演じているのがピエール瀧という俳優です。昨年の一二月一九日の深夜（正確には二〇日）テレビ朝日の「ヤーヌス」という番組で「アリとキリギリス」が取り上げられました。その折り私も専門家ということで出演しております。夏目三久氏と共にこの番組の司会を務めていたのがピエール氏（瀧氏というべきでしょうか）です。ブラジルでは、アリとキリギリスが仲良くなって終わるということが話題になったとき、ピエール氏は「それがいいな」と言っていました。この発言は、ＣＭがキリギリスを肯定的にとらえているのと重なります。どうやら、このＣＭはピエール氏自身か、あるいはあの番組を見た関係者の発案ではないかと推測しています。